

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04785

研究課題名(和文) 小中一貫を図った音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法開発

研究課題名(英文) The Development of Japanese Folk Song Teaching Method with the Help of Digital Textbooks for Music Education Toward Consistency in Education from Elementary School through Junior High School

研究代表者

鈴木 慎一郎 (SUZUKI, Shinichiro)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：90442087

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校と中学校との一貫を図った音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法を開発し、教員養成のプログラムとしても位置付け、普及を図ることを目的とした。

第一に、小中一貫を図った音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡のカリキュラムを構築した。第二に、音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法を開発した。第三に、「郷土に伝わる民謡」を題材とした教材の開発を試みた。第四に、音楽デジタル教科書ならびに「郷土に伝わる民謡」を題材とした教材を活用した教員養成のプログラムの普及を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ICT活用指導力の育成ならびに日本の民謡の指導法に関して学術的に検証を行ったものである。研究成果については、日本音楽教育学会、日本音楽表現学会等において積極的な口頭・論文発表を行った。

一方、教員免許状更新講習、附属学校等の研究発表大会等でも取り上げることで、現職教育の一環としても広く発信した。さらには大学・大学院の授業でも取り上げ、学生がICTを活用し取り組む内容を実践し、教員養成のプログラムとしても位置付け、定着を図った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop Japanese folk song teaching method with the help of digital textbooks for music education toward consistency in education from elementary school through junior high school. And I have positioned them as the teachers training program.

Firstly, I plotted out the Japanese folk song curriculum with the help of digital textbooks for music education toward consistency in education from elementary school through junior high school. Secondly, I developed Japanese folk song teaching method with the help of digital textbooks for music education. Thirdly, I unearthed local folk song. Finally, I have positioned them as the teachers training program.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽デジタル教科書 日本の民謡 ICT 小中一貫 「郷土に伝わる民謡」 教員養成

1. 研究開始当初の背景

2008(平成20)年告示の学習指導要領では、「我が国や郷土の伝統音楽の指導」の充実が謳われ、教科書においても日本の代表的な民謡が掲載され、教材として位置付けられていた。また、研究者による実践研究も展開されつつある(佐川2007、志民2014等)。とはいえ、現状を見ると、一部の関心の高い教員によって実践が展開されるに留まり、定着しているとは言えない。仮に実践されたとしても、鑑賞に留まっている授業が多い。研究代表者が鳥取県の代表的な民謡である《貝殻節》の実践率について鳥取市内を対象に調査したところ、小学校は59%、中学校は23%であった(鈴木2015)。その要因の一つとして「指導法が分からない」という回答が挙げられた。2017(平成29)年告示の学習指導要領においても「我が国や郷土の伝統音楽の指導」の一層の充実が求められており、指導法開発は喫緊の課題である。

定着を図るためには、日本の民謡に対する造詣が浅い教員にとっても、実践可能な無理のない指導法を開発し、浸透させることが決め手となる。そのために最も身近な存在である教科書に着目する。近年、発行された音楽デジタル教科書には、音声や動画が収録されており、音楽表現と合わせた日本の民謡の実践の展開も期待できる。日本の民謡を歌い慣れない教員であっても、音楽デジタル教科書を活用することで、表現活動を取り入れた授業実践が可能となる。

その他、実践できなかった要因として「授業時数の不足」も挙げた。例えば、《貝殻節》は、小学校、中学校の教科書に鑑賞教材として掲載されているものの、各校種における指導法の明確な違いは示されていない。また、参考として全国の民謡が紹介されているものの、全曲を実践できるだけの授業時数は確保されていない。民謡は現在、共通教材として指定されていないため、教科書に掲載される基準が一貫していない。したがって、各曲がどのような変遷を経て教科書に掲載されてきたかについて明らかにする必要がある。そのデータベースに基づき、教材の精選を行い、小学校、中学校の音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡のカリキュラムを構築することで、限られた授業時数でも効果的な実践を展開することが可能となる。

ところで、教科書は全国の主要な日本の民謡を継承するためには有効である一方で、それぞれの地方に伝承されている、余り有名ではない郷土の民謡までは網羅されていない。この点については、各学校、各教員による地域の教材開発としての自主的な働きが求められているものの、現実には機能していないことが多い。また、日本の民謡には身体表現を伴うことが多いにもかかわらず、教科書では手薄となっている。そこで本研究では、映像で身体表現も記録された「郷土に伝わる民謡」を題材としたDVD教材の開発も同時に行う。

2. 研究の目的

本研究では、小学校と中学校との一貫を図った音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法を開発し、教員養成のプログラムとしても位置付け、普及を図ることを目的とする。

3. 研究の方法

- (1) 戦後の教科書に掲載された日本の民謡のデータベース化を行い、教材の精選を行い、小中一貫を図った音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡のカリキュラムを構築する。
- (2) DVD教材を開発するために、教科書には掲載されていない「郷土に伝わる民謡」の収集を行う。
- (3) 上記(1)で構築したカリキュラムに基づき、鳥取大学附属小、中学校においてモデル指導案の作成、実験授業を行い、音楽デジタル教科書を活用した、表現(歌唱、身体表現)を取り入れた指導法を開発する。さらには教員養成のプログラムとしても位置付け、指導法の波及を図る。

4. 研究成果

- (1) 小中一貫を図った音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡のカリキュラム構築
音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡のカリキュラム

第一に、小中一貫教育に取り組んでいる文部科学省研究開発学校指定校ならびに鳥取市内の義務教育学校の現状を概観した。第二に、小中一貫を図った音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡のカリキュラムを構築した。

小学校の総合的な学習の時間における民謡学習

小学校の総合的な学習の時間における日本の民謡学習のモデル指導案を構想した。単元名は「日本の民謡を探ろう」とし、三段階による単元計画を構想した。

小学校道徳教科書における「我が国や郷土の文化」

第一に、2017(平成29)年発行の全8社の小学校道徳教科書における「伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」に関する教材を整理した。第二に、日本の民謡に着目して教材分析を行った。その結果、《YOSAKOI ソーラン(節)》が教育出版の第5学年と光文書院の第6学年に掲載されていたことが確認できた。

中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重」

中学校学習指導要領を概観した後、2019（平成 31）年発行の全 8 社の中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」に関する教材を整理した。続いて、日本の民謡に着目して教材分析を行った。その結果、東京書籍の第 3 学年と学校図書第 2 学年において日本の民謡が題材とされ、奄美と石垣島と、いずれも九州南方の民謡が取り上げられていたことが確認できた。

フォークダンスの日本への普及と日本の民謡

第一に、日本におけるフォークダンスの普及を整理した。第二に、中山義夫（1905-1986）の生涯を示し、中山の著書から日本の民謡の位置付けを明らかにした。第三に、中山が著書の中で紹介した鳥取県の民謡の内容と特徴を明らかにした。その結果、《三朝小唄》、《キナンセ節》、《貝殻節》、《杉音頭》、《三朝音頭》、《大山音頭》、《鳥取傘踊り》、《米子音頭》、《皆生小唄》の 9 曲の鳥取県の民謡が紹介されていた。9 曲中、7 曲（77.8%）が戦後につくられた新民謡であった。

（ 2 ）教科書には掲載されていない「郷土に伝わる民謡」の収集

新民謡《吉岡小唄》と野口雨情

第一に、新民謡の普及を図った「楽浪園」に着目し、「楽浪園」から「芸術教育協会」への動向を概観した。第二に、鳥取県における教育の動向と関連付けながら、野口雨情（1882-1945）が作詞した鳥取県の新民謡を整理した。第三に、野口雨情作詞、三上留吉（1897-1962）作曲の新民謡《吉岡小唄》の作成の経緯を整理した結果、1936（昭和 11）年に作詩されたことを確認できた。さらに歌詞、音楽分析により特徴を明らかにした。

新民謡《伯耆小唄》

1936（昭和 11）年、鳥取県女子師範学校発行の『鳥取県郷土史』に掲載されていた、都田鼎作詞作詞、中山晋平（1887-1952）作曲の鳥取県の新民謡《伯耆小唄》について歌詞、音楽分析により特徴を明らかにした。

（ 3 ）音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法開発

小学校の音楽デジタル教科書における日本の民謡の基礎調査

第一に、音楽デジタル教科書について概観した。第二に、音楽デジタル教科書の分析を行い、日本の民謡の掲載方法について明らかにした。第三に、音楽デジタル教科書とDVDを活用した日本の民謡の学習プランを構想した。

中学校における音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法開発

第一に、中学校学習指導要領における我が国や郷土の伝統音楽の位置付けを概観した。第二に、音楽デジタル教科書における「日本の民謡」の教材分析を行った。第三に、音楽デジタル教科書の操作方法も明記したモデル指導案を作成した。第四に 2017（平成 29）年 7 月 7 日（金）に開催された、鳥取大学附属中学校研究発表大会においてモデル指導案に基づいた公開授業を行い、実践の有効性を検証した。

公開授業でのアンケート調査の結果から、94%の生徒が音楽デジタル教科書は歌う際の参考になったと肯定的な感想を示した。また、指導前後の検定を行った結果、指導後に日本の民謡が好きになった生徒が増加したことが判明された。教員免許状更新講習受講者からも音楽デジタル教科書に対する期待が寄せられた。以上から、鳥取大学附属中学校における日本の民謡の学習の際に、音楽デジタル教科書の活用が有効であることが明らかとなった。

ICTを活用した《ソーラン節》の授業実践

第一に、《ソーラン節》の教材としての位置付けを整理した。第二に、中学校音楽デジタル教科書ならびに日本フォークダンス連盟制作・発売のDVD『学校フォークダンス：小学校編』を活用した《ソーラン節》の授業を鳥取大学附属小学校第 4 学年対象に、2020（令和 2）年 1 月 23 日（木）に実践した。検証の結果、94%の子どもが音楽デジタル教科書は参考になったと回答し、有効性が明らかとなった。

（ 4 ）音楽デジタル教科書ならびにDVD教材を活用した教員養成のプログラム

小学校教諭免許状を取得希望の学生ならびに教員免許状更新講習の受講生における日本の民謡と音楽デジタル教科書に対する意識を 2017（平成 29）年度に調査した。「日本の民謡が好きか」の回答では、学生の 78%、教員の 70%が「どちらでもない」を選択したのに対し、学生、教員とも 95%が学習の必要性を痛感していた。日本の民謡の範唱については、学生の 15%、教員の 10%が可能と回答したに留まり、学生の 78%、教員の 85%が指導上の不安を感じていた。このように日本の民謡に対しては、世代、立場は異なるものの、同様の意識を抱いていることが明らかとなった。

一方、音楽デジタル教科書については若干意識が異なった。58%の学生は音楽デジタル教科書を使用したいと回答し、78%の学生が普及を望んでいた。それに対し、教員の 75%が使用したいと回答し、100%の教員が普及を望み、強い期待を寄せていることが明らかとなった。ICTに強いと思われる若者である学生よりも、教員の方が音楽デジタル教科書の使用を希望し、普及に期待を寄せていた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 鈴木慎一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 新民謡《吉岡小唄》と野口雨情：「楽浪園」から「芸術教育協会」への動向を踏まえて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽教育史学会創立30周年記念誌	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一郎	4. 巻 18-2
2. 論文標題 『山梨県総合郷土研究』における新民謡：『微細郷土研究：加納岩町に関する』を参照して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一郎	4. 巻 18-3
2. 論文標題 鳥取県女子師範学校の郷土教育における新民謡：《伯耆小唄》に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 27-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一郎・谷口峻音	4. 巻 17
2. 論文標題 ICTを活用した《ソーラン節》の授業実践：踊りを取り入れて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一朗	4. 巻 16-2
2. 論文標題 中学校道徳教科書における「郷土の伝統と文化の尊重」：日本の民謡に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一朗	4. 巻 16-3
2. 論文標題 フォークダンスの日本への普及と日本の民踊：中山義夫と鳥取県の民謡	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 7-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一朗	4. 巻 15-1
2. 論文標題 小学校の「総合的な学習の時間」における民謡学習：日本の民謡を探ろう	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 71-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一朗・谷口峻音・奥村理恵・田村里架・舛田和雅子	4. 巻 9
2. 論文標題 音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡のカリキュラム：小中一貫を見通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育研究論集	6. 最初と最後の頁 31-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一郎	4. 巻 15-2
2. 論文標題 小学校道徳教科書における「我が国や郷土の文化」：日本の民謡に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一郎	4. 巻 20-2
2. 論文標題 音楽教科書における《貝殻節》の掲載の現状と課題：浜村温泉と賀露に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一郎	4. 巻 14-1
2. 論文標題 小学校の音楽デジタル教科書における日本の民謡の基礎調査：《こきりこ》を事例として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 123-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一郎	4. 巻 8
2. 論文標題 日本の民謡と音楽デジタル教科書に対する意識調査：教員養成と現職教育の側面から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育研究論集	6. 最初と最後の頁 45-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木慎一郎・廣富恵美子	4. 巻 14-2
2. 論文標題 中学校における音楽デジタル教科書を活用した日本の民謡の指導法開発：《ソーラン節》を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地域学論集	6. 最初と最後の頁 123-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木慎一郎
2. 発表標題 鳥取県女子師範学校の郷土教育における新民謡
3. 学会等名 教育史学会第65回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木慎一郎
2. 発表標題 『香川県総合郷土研究』における新民謡：《高松小唄》に着目して
3. 学会等名 2021年度日本音楽教育学会中国四国地区例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木慎一郎・谷口峻音
2. 発表標題 ICTを活用した《ソーラン節》の授業実践：踊りを取り入れて
3. 学会等名 日本音楽教育学会第51回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木慎一朗
2. 発表標題 新民謡《吉岡小唄》と吉岡温泉：野口雨情に着目して
3. 学会等名 日本音楽表現学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木慎一朗
2. 発表標題 音楽デジタル教科書における日本の民謡の現状と課題
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木慎一朗
2. 発表標題 《貝殻節》の教材化における現状と課題：賀露に着目して
3. 学会等名 日本音楽表現学会第16回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木慎一朗
2. 発表標題 師範学校の郷土教育における民謡の実践：鳥取県師範学校を事例として
3. 学会等名 教育史学会第62回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木慎一朗
2. 発表標題 小学校教育におけるICT、プログラミング学習、アクティブ・ラーニングを問う
3. 学会等名 日本音楽教育学会第48回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 鈴木慎一朗(日本音楽教育学会編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 248
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

1. 著者名 鈴木慎一朗(石井玲子編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 教育情報出版	5. 総ページ数 189
3. 書名 表現者を育てるための保育内容「音楽表現」	

1. 著者名 鈴木慎一朗(笹野恵理子編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 初等音楽科教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------